

令和元年度

視察研修報告書綴

研修日：令和元年 11 月 7 日（木）

視察研修地：福井県あわら市

研修日：令和元年 11 月 8 日（金）

視察研修地：福井県池田町

研修日：令和元年 11 月 8 日（金）

視察研修地：福井県大野市

研修日：令和元年 11 月 9 日（土）

視察研修地：福井県福井市

基山町議会

総務文教常任委員会

令和元年度 総務文教常任委員会 視察研修報告

1. 研修日程、研修策及び件名

- | | | | |
|-----|-------|--------------------|------------------------|
| (1) | 11月7日 | 福井県あわら市
(金津小学校) | 小・中学校の学力向上の取り組みについて |
| (2) | 11月8日 | 福井県池田町 | リサイクル事業の取り組みについて |
| (3) | 11月8日 | 福井県大野市 | ゆい くに 結の故郷づくり交付金事業について |
| (4) | 11月9日 | 福井県福井市 | 一乗谷朝倉氏遺跡資料館視察 |

2. 参加者 総務文教常任委員会 6 人、議長 1 人、議会事務局 1 人 計 8 人

- | | | | | | | | |
|---------|---------|-------|-------|------|--|--|--|
| (委員長) | 栗野 久明 | | | | | | |
| (副委員長) | 大久保 由美子 | | | | | | |
| (委員) | 大山 勝代 | 河野 保久 | 松石 健児 | 天本 勉 | | | |
| (議長) | 品川 義則 | | | | | | |
| (議会事務局) | 藤田 和彦 | | | | | | |

3. 研修報告

- | | | | |
|-----|-------|--------------------|---------------------|
| (1) | 11月7日 | 福井県あわら市
(金津小学校) | 小・中学校の学力向上の取り組みについて |
|-----|-------|--------------------|---------------------|

【あわら市の概要及び研修目的】

あわら市は人口約 2 万 8 千人、面積 116.98 k m²で石川県加賀市に隣接する福井県北端の市であり、平成 16 年に 2 町が合併し現在のあわら市が発足した。

そのような状況の中、教育の場として小学校が 7 校（他 3 校が休校）、中学校が 2 校あるが、市としては小学校の統廃合を検討しているとのことであった。

今回、県全体としても教育水準の高い福井県の中で、市政ではあるが比較的人口規模が小さくて成果の上がっている、あわら市の先進的な取り組みを学ぶため研修を受けた。

【研修内容】

○平成 31 年 4 月実施の「全国学力・学習状況調査」の結果の評価と取り組みについて

全国学力・学習状況調査の結果は、学力や学習状況の一部分を測定したものではあるが、総合的な学力を目指す教育活動を評価するための資料と当市では位置付けているとの説明であった。

特筆すべきは、4 月に実施したテストの採点結果を待つのではなく、全職員でいち早く採点し分析を行い、5 月には授業改善策をまとめ実践に移しているとの説明で、7 月の公表時には保護者への通知を行うなど状況を早く把握し、9 月からの授業改善に生かしているとのことであった。12 月の県の学力調査についても同様の手順で教育活動行っていた。

この点はぜひとも基山町でも検討していただき、2、3 か月でも早く授業改善し

ていくシステムを検討していく必要性を学んだ。

○学力の向上には学校と家庭、地域の連携が不可欠と考えられているが、具体的な方策について

児童生徒は、地域や家庭、学校のそれぞれが責任をもって教育するという理念の下にそれぞれの代表者が福井型コミュニティスクールで協議を行っているとの説明を受けた。

さらに、当市独自に行った調査では地域の関心が高い事実と学力との間には相関関係があるとの説明を受け、「ふるさととあわらに誇りと愛着を持ち、生きる力をはぐくむ教育」の下でふるさと教育に力を入れ、地域を進める体験事業の補助金（各校 20 万円）については、県の施策終了後も市の単費で継続するとのことであった。

基山町でも、ふるさと教育の重要性は認識し同様の活動は行っているが、地域の教育事業を対象に補助金を予算化している点については、今後の検討課題であると学んだ。

○小中学校共に二学期制を導入していた、経緯と成果及び課題について

2 学期制導入は福井県下全てに導入しているのではなく、あわら市、敦賀市、福井市などが導入している。

あわら市では学力調査での各教科の平均点が低迷する時期が続いたこと、様々な諸問題解決で児童生徒と教師が余裕をもって関わり合う時間を確保することも視野に入れ導入したとの経緯の説明を受けた。

2 学期制にすることで、学期末の成績表作成時間等による中途半端な授業が解消され、授業時間が平均 14.8 時間増えた。また、授業にゆとりができた関係でつまずきのある子供たちへの補充学習や教師の個別学習や家庭訪問時のアドバイスができるようになったとメリットの説明があった。さらに、移行当初では通知表が 2 回となったことで保護者等との情報共有に不安を感じる意見があったが、通知表に代わる子どもの学習や生活の情報をもとに懇談を実施しているとの説明を受けた。

基山町でも教員が学期末の通知表作成等で多忙を期しているとのことを耳にする。本来の授業や生徒指導に力が注がれるのであれば理にかなったことで、先進地の状況を学び検討しなければならない課題となっている。

あわら市での研修



【研修対応者名】（敬称略）

あわら市議会副議長	吉田 太一
教育委員会 参 事	荒川 誠
金津小学校 校 長	志田 聖一
議会事務局 局 長	島田 俊哉

（２） 11 月 8 日 福井県池田町 リサイクル事業の取り組みについて

【池田町の概要及び研修目的】

池田町は人口約 2.5 千人（高齢化率 43.3%）、面積 194.65 k m²で 92%が山地で、福井県の中央部に位置している。また、現在岐阜県に抜ける国道 417 号線の冠山トンネルの工事中で、その完成による経済効果を町民は期待している。

減少し続ける人口対策が深刻化しているため、地域資源を生かした木へのエネルギー代替や食費やエネルギー支出を町内資源むけ支出への転換等を試み、改善を図ろうとしている。

今回ごみ処理においてのリサイクル事業について、その取り組みを学ぶことを研修目的とした。

【研修内容】

○リサイクル事業の取り組みについて（地域資源循環型農村の取り組み）

畑の生産 ➡ 販売 ➡ 生ごみの回収 ➡ 土づくり（牛糞を利用した）一定のルールを作りリサイクルにより価値を守り育てるとの説明を受けた。

家庭で出た生ごみ（食の資源）を紙袋に入れてもらい町が回収し、町内の酪農家の近くに設けた工場で牛糞と生ごみを拡販し堆肥を生産する。生産者は堆肥を混ぜて土づくりを行い、消費者に喜んでもらえる農作物を出荷し、地域の方の共同作業で完売するリサイクル事業の説明であった。

基山町のごみの分別の取り組みと違ったことではあったが、地域で協力して何とか外に消費を求めず、外貨を稼ごうとする試みは、所管とは違ったところで共感を得る説明をいただいた。

その後、幼児のための木育施設「おもちゃハウス こどもと木」や建設中の児童が学べる木育施設を案内していただいた。

池田町での研修



【研修対応者名】（敬称略）

池田町議会 議長 和田 義則
農村政策課 課長 山崎 政弥
総務財政課 地方創生戦略プラン担当主幹 宮下 礼
議会事務局 局長 島田 俊哉

（3）11月8日 福井県大野市 結の故郷づくり交付金事業について

【大野市の概要及び研修目的】

大野市は人口約3万5千人、面積872.43k㎡で福井県内の市町の中では最大の広さを持ち県面積の5分の1を占め、真名川の下流に沿って開ける大野盆地は海拔200m前後である。昭和29年に2町6村で合併して発足し、昭和45年と平成17年に各1村を編入し現在に至る。

人口規模は基山町の2倍で、まちづくりの交付金事業で市民との協働による地域の活性化を図っているが、基山町のまちづくり基金を活用した交付金のあり方など参考となるものがあるのではないかと計画した。

【研修内容】

○結の故郷づくり交付金制度について

市民参加や市民協働の意識を醸成し、豊かで活力に溢れた住みやすい地域づくりを推進するため、市民自らが主体的に企画立案し実施する事業に対し財政支援する目的であり、交付対象団体は、市内9地区のまちづくり団体若しくは、地区団体連絡協議会の2団体であるとの説明を受けた。また、事業の実施団体は、まちづくり団体、地区団体連絡協議会、自治会、社会教育関係団体（公民館区域を単位とする）で交付金の総額は前年度の市民税の1%を限度とし、令和元年度は1,380万円が予算化されている。

この制度は1期3年で1期ごとにヒアリングを行い、制度を見直し現在4期目で10年目を迎えている。制度の見直しは対象となる交付金事業で、当初市民協働の促進と地域の活性化の効果を期待したもので、2期目から地域の課題解決の効果や、地域の人材の掘り起こしと育成を目的としたものが追加された。

この制度の今後の展開と課題については、行政区ごとの活動を交付金の対象としていることから、頑張る集落と何もしない集落との間で温度差が出ていることや、行政区の人口や世帯数の大小で事業の取り組みの問題点が出ている。また、行政区の高齢化で新たな課題も上がっている。

予算規模は違うが基山町でも同じような問題点も出てきている状況もあり、まちづくり基金による交付事業も制度の見直しの検討は常に行って進化する検討が必要である。

○交付金事業説明の後、3人の公民館長から各々の結の故郷交付金事業の説明を受けた。

大野市での研修



【研修対応者名】（敬称略）

大野市議会 議 長 梅林 厚子
大野市企画総務部総務課 地域振興室 企画主査 廣田 直樹
議会事務局 局 長 岸田 尚悟
大野市教育委員会 富田公民館 館 長 吉本 正和
大野市教育委員会 上庄公民館 館 長 帰山 康治
大野市教育委員会 和泉公民館 館 長

（４）１１月９日 福井県福井市 一乗谷朝倉氏遺跡資料館視察

【研修目的】

基山町は弥生時代の土器から、時代を経て近年の置き薬の時代まで人々の営みを知る上での貴重な資料が出土あるいは現存する。いずれ一か所に保管あるいは展示しなければならぬ。一乗谷朝倉氏遺跡資料館は中世から近世に至るまでの^{しやくだに}笏谷石の加工や細工の文化があり、その説明と展示を行っている。

議員として、見分と知識を得るため視察を計画した。

【研修内容】

○現地ではボランティア活動と思える方から説明を受けた。

一乗谷朝倉氏遺跡資料館での研修



4. 各委員の所感

- (1) 11月7日 福井県あわら市 小・中学校の学力向上の取り組みについて
(報告者 栗野 久明)

研修の中での説明で、福井県は昔から勤勉な資質を持つ人が多いと自負していた。教師も授業を受ける子供たちもそのようなことから、教育熱心で今のレベルにあると思っているとのことでした。

学力調査のテストが終わると、担任の生徒の答案用紙をコピーして採点し、勉強不足の問題点を分析し授業に生かしているとのことですが、忙しい教師にそこまで要求できるのかなど、二学期制も含めて先生にゆとりができるような仕組みをぜひ検討願いたい。

(報告者 大久保 由美子)

「全国学力・家庭状況調査」が全てではなく、学校の教育過程における1つの資料として知・徳・体の総合的な学力の定着を目指すあわら市。実施当初は全国平均率よりは高くなかったと説明されたが、では何が上位まで上がるきっかけとなったのか。短い視察時間の中では読み取るのは難しいが、福井県や各市町教育委員会の指導や数々の取り組みが結果へ繋がっていると考えられる。

最後に子どもたちが明るく落ち着いた学校生活を送っていることや先生たちの勤勉さにもよるのであろう。今回の視察を通して基山町の子どもたちも「全国学力・家庭状況調査」を成長過程の一面として捉え、更なる総合的な成長を育まれるよう注視していきたい。

(報告者 大山 勝代)

福井県は「全国学力・学習状況調査」の結果が上位にランクされている。視察させて頂いたあわら市の学校は県の中でもその上位にある。小中学校とも2学期制を導入。授業時数の確保に有効とのこと。目指す「地域に根ざした学校づくり」として家庭・地域・学校が一体となり、福井県コミュニティスクール事業推進のもと教育力向上に取り組んでいるとの説明があった。具体的な話の中心にはならなかったが、福井県は全学年少人数学級推進のための県独自での財政負担をしている。私個人の感想としては、このことも学力が上位にあると考えられる。

(報告者 河野 保久)

- ① 全国学力調査(4月実施)や12月の県学力調査を実施しているが、いずれも実施後すぐにすべての学校で全教員により採点と分析を行い、授業の改善策を立て、実践に移している。

全国学力調査を授業評価のための評価資料として位置づけ、県の学力調査と効果的に連動するよう教員が全員一体となって取り組んでいるからこそ、小学生の学力向上に効果的に結びついていると感じた。

- ② 教育振興基本計画のもとふるさと学習の推進に力を入れている。

地域への関心が高い事実と、学力との間には相関関係があるという話をされていたが、なるほどと思わされた。

基山町でも基肄城を中心に地域の歴史教育に力を入れているが、今後さらに充

実していくよう議員として議会としても応援していくべきと強く感じた。

- ③ 平成 22 年度より中学校で、平成 26 年度より小学校でも二学期制を導入している。

学力調査での平均点が低迷する時期が続いたことから、体験活動等を削減することなく「総合的な学力」の向上を図ることを目的としたとのこと。

1 年間のほぼ中間にあたる 10 月の第 2 月曜までを前期、その翌日からを後期としている。

授業時間数の増加にともないきめ細やかな指導、連続性のある学習等いくつものメリットもでてきており、保護者・児童・教師の間でもおおむね良好との評価であるというのが興味深い。

教師の間では、通知表作成の手間が少なくなり、授業の準備や児童との関わりに時間を使えるようになったと、予想をしなかった結果を生んでいる点は興味深い。

- ④ 視察先があわら市の役場庁舎でなく、研修の目的である学力向上に取り組んでいる小学校（あわら市金津小学校）の会議室であったのが、臨場感があって新鮮であった。
- ⑤ 金津小学校の授業風景を参観させてもらって一番に感じたのは、児童の教師を見る目が真剣で、それでいて教室全体の雰囲気が落ち着いていて、やわらかであったことだ。
- ⑥ 行き交う児童は皆、気持ちよく「こんにちは」の挨拶を笑顔でしてくれた。登校は制服だが、学校の生活は体操服でという決まりだそうだが、当然のこととして児童がそれを守って学校生活を送っているのが好印象だった。
- ⑦ 教育委員会の職員の話の中に、教職員に対する感謝の気持ちが感じられ、あわら市の教育現場のすばらしさが学力向上にもつながっているのだなということが理解できた。

（報告者 松石 健児）

全国学力・学習状況調査の結果は、学力や学習状況の一部分を測定したものではあるが、総合的な学力を目指す教育活動を評価するための資料とあわら市では位置付けているとの説明であったが、これは基山町における教育でも同様のことである。

基山町の教育との大きな違いは、

- ① 4 月の全国学力・学習状況調査の実施後、7 月の国の公表を待たず、全ての学校で全教員による採点と分析を行い、5 月をめどに授業改善策をまとめて実践に移している。
- ② あわら市独自で行っている学力調査（小学校 2～5 年 4 月実施）の結果を分析し、各学校の特徴をつかみ、学年当初から授業改善に生かしている。
- ③ 12 月には福井県学力調査実施においても実施後すぐに県の結果を待たず独自採点を行い、4 月、9 月の授業改善の取り組みを評価し改善策が必要な場合には、1 月から実施する。

と、学力調査に関しては、迅速かつ継続的な P D C A サイクルが形成されており、児童・生徒への配慮が十分なされていると感じた。

また、ふるさと教育に関しては、実際に、学力結果からも地域への関心が高い子ども

もたちの学力は正答率も高くなっており、地域への関心が高い事実と学力との間には相関関係があることを実証しているという検証は素晴らしい。福井県では平成 26 年から 3 年間行われた「地域と進める体験事業（各校 20 万円）」も、あわら市では市単独予算で事業を継続しており、地域との関係性の重要さを認識していることが伺える。

総合的な学力の育成という面から市内企業と連携したキャリア教育の推進も実施。ふるさとの魅力を歴史や産業、コミュニティなどから多面的に取り入れている点は参考に値する。

小中学校共に 2 学期制を導入したことにより、学期末の成績表策定時間等の軽減がなされ、児童・生徒達への補充学習や個別指導の拡大に繋がっている。教師自体の負担軽減にもなることで、授業内容の充実にも繋がるのだろう。

全国学力・学習状況調査の結果は、学力や学習状況の一部分を測定したものではあるが、子どもの教育の指標として教師が役立てるものはそう多くない。教師の労働時間負担軽減も大切なことだが、学力低下を招いては身も蓋もない。あわら市のように、学習評価を継続的かつ迅速に授業に生かしていくような事例を起用することは、非常に有効だと感じた。2 学期制は取り入れるに値するものだと考える。

（報告者 天本 勉）

あわら市教育委員会から保護者への通知の中で、あわら市の小学生は読書の関心が低いことから、「本は先生 読書は心の栄養、読書に親しむ機会を増やそう」ということで、家庭読書デーの設置や読み聞かせを行っている。また、「必読書」を学年ごとに決めて、きっかけづくりを行っている。

「ふるさとを大切に作る心を育てよう」ということで、地域の祭りの行事などに参加するように呼び掛けており、総合力のある子は成績も良く相関関係があるとの説明で、基山町においても子供たち一人一人が大切な町民の一人として、地域全体で育ていく姿勢が大切であると感じた。

（2）11 月 8 日 福井県池田町 リサイクル事業の取り組みについて

（報告者 栗野 久明）

国道を走ると整備された山林が続く、国道沿いには公共の建物や民間の店舗も少数であるが開業し、さびれた中山間地のイメージはない。人口減は 2,000 人を死守すると目標を上げ、頑張っている。今回視察することはできなかったが、観光客をターゲットにアスレチック的ポイントや山・川・神社・グルメなどいけだ農村観光協会の開運ウォーキングマップで案内されていた、所管が違うがまちおこしで池田町の元気さを見た気がした。

基山町も観光スポットがやや点から線になりつつあるが、もっと仕掛けを増やせば地の利のある基山町に観光客を呼べると感じた。

（報告者 大久保 由美子）

池田町の「食Uターン事業」は生ごみを地域や農家、畜産業が協働のサイクルで活用して、有機肥料や安心安全の食材などを作り収益も生みだし、何よりも元気な高齢者のライフスタイルで町が活性化している。今後、高齢化が進むなか課題もあるだろうが素晴らしい取組でした。

また、国道を中心に役場を始め公共施設などがコンパクトに集合しており、「経済政策」の目標数値も設定されていた。人口が減少する中、町にある自然や産業、地域資源を創意工夫しながらまちづくりが行われており感心した。

池田町は人口が少ない中を活性化に努力して邁進されていることから、基山町は利便性のよいトカイナカのコンパクトな町で、農業は減少しているが視察で得た施策を地域の特性や発掘に活せるよう提案していきたい。

(報告者 大山 勝代)

福井県は佐賀県と似ていて、平成の大合併で9市8町に編成されている。その中で池田町は合併せず単独行政を進めていることが基山町と共通点か。しかし、地域的には盆地で中山間地、冬場は積雪が多く近隣との交通が遮断される。過疎・特定農山村・振興山村・特別豪雪辺地地域指定を受けている。人口は基山町の7分の1、人口減少を食い止めながら、これまでもこれからも単独行政が維持されている理由はどこか。任期が長い町長のトップダウンでの運営もその理由の1つだろうと感じた。いくつかのユニークな施策の中で、「地域資源循環型農村」として生産・販売・消費が、外に向けてではなく池田町の中で行われている仕組み作りに興味を覚えた。小さい町だからできるのだろう強みの認識を新たにした。

(報告者 河野 保久)

- ① 「地域資源循環型農村を目指して」という明確な指針を打ち出し、「生産」→「販売」、「回収」→「土づくり」の具体的な施策を行っているのは、明確で、町民にもわかりやすい型になっていると思う。
- ② 回収を「食Uターン事業」として展開している。約100人の住民で作るボランティア団体「環境Uフレンズ」が、週3回「あぐりパワーアップ号」という専用回収車を利用して回収を行い、この事業を支えている。
- ③ 事業のポリシーとして「1人の1万ポンドより、1万人の1ポンド」という言葉があった。認知症の見守り運動にも通ずるところがあり、何故かうれしかった。
- ④ 人口2,000人の維持は、ちょっとした努力で可能であるという理念のもと、「経済政策」目標数値を立てている。1%の人口取戻しと称し、若い家族転入を増やすための町営住宅団地整備も行っている。
- ⑤ 「おもちゃハウス こどもと木」を見学。幼児を対象とし、木の資源を活かし、「学ぶ・遊ぶ・結ぶ」をテーマに、木とふれあい、木に親しみを持ってもらうことを目指し、地域おこし協力隊として池田町に来た若い女性数名で運営されていた。こじんまりとしていい施設であった。
- ⑥ 「おもちゃハウス こどもと木」のとなりに、よく似た建物の建設工事が行われていた。聞いてみると「おもちゃハウス」は幼児用、新しく建設中のものは小学生用とのこと。現在児童数80人の町であるが、本気で若者世帯を呼び込み、子どもを増やしていきたいという町長の本気度が感じられる。
- ⑦ その他、山の自然を活かした「ツリーピクニックアドベンチャーいけだ」(事業費総額7億円)もあり、交流人口も増えてきている。基山町も自然環境という面では負けていない、何か策を打たねばと感じた。
- ⑧ 「こっぽい屋」という池田町産マーケット配達車が走っていた。「こっぽい」と

は「ありがたい」という意味だそうだ。小さい町ではあるが、魅力を感じる町であり、「まちづくり」を実践している町であった。

（報告者 松石 健児）

池田町は福井市へと流れる一級河川・九頭竜川水系「足羽川」の最上流地域ということで、「水源の町」を標榜し、「水源の水を守り（池田町水源保護条例）、作り手の健康を守り、食べる人の安心を守るための環境保全型農業」を実践。地域資源循環型農村を目指している。

平成14年から始まった食品資源再生事業「食Uターン」は特徴的な取り組みだ。家庭から出る生ごみと牛糞、もみ殻を混ぜてオリジナルな高品質堆肥を作る事業である。これら高品質な堆肥から、質の高い農作物の生産へと循環する。

家庭から出た生ごみを新聞紙にくるみ、町指定の紙袋へ入れ、各地区のごみステーションに出す。NPO法人環境Uフレンズ（会員数約100人）が週3回、専用トラックで回収。また、月に2回、ガソリンスタンドや飲食店から廃油回収も行い、軽油への再生を行っている。これらの活動は平成21年に食品リサイクル推進において池田町と連名で環境大臣賞を受賞。

また、平成17年から始まった「いけだエコキャンドル」というイベントは、「環境」「まちづくり」「観光交流」をテーマに、町民総出で廃油からろうそくを作り開催されている事業（http://ecoikeda.jp/wp_ecocandle/）で、自治体環境グランプリにおいて、こちらも平成18年に池田町と町民が連名で環境大臣賞を受賞している。

このほか、森林資源である木材を生かした木育拠点施設「おもちゃハウス こどもと木」、木工体験・技術継承施設「WOOD LABO」、森の中の観光「ツリーピクニックアドベンチャーいけだ」や、地域における「木の循環経済」の構築を目指すバイオマスエネルギーの利用等、枚挙にいとまがない。

人口約2,500人と小さな町ではあるが、環境保全、コミュニティの活性化など、自治体と町民が一体となって活動している強さを感じた。これはある意味、地域活動ではなく地域活性化運動に近いと思う。

基山町も協働のまちづくりを掲げているが、池田町のように町民が義務感からではなく、地域愛と楽しみをもって貢献するという想いの構築が不可欠だと感じた。また、基山町では畜産業はそれほど大きくないため、牛糞などの活用によるたい肥の製造は厳しいが、森林を活用した地域環境のイメージ作りは可能ではないかと考える。ごみリサイクルへの啓発も、今後もっと必要になるだろう。基山町民一人ひとりが循環型社会への意識を高めることがとても大切だと感じた視察先だった。

本年度、「基山町環境基本条例」が策定される予定だ。来年度施行後立案される環境基本計画の中には池田町のような、地域で生かされる計画を盛り込めるよう注視していきたい。

（報告者 天本 勉）

家庭で出た生ごみ（食の資源）を紙袋で回収し、生ごみと酪農家の牛糞と攪拌しながら堆肥を生産している。

生ごみの回収も分担制で町民自ら行い、農産物の生産から販売・回収・土づくりまで地域資源循環型農村づくりを行っている。

基山町においても、「農業は土づくりから」を基本とし、基山町の農産物は基山町で消費することを合言葉に、生産者と消費者の繋がった“地産地消”を推進する必要性を感じた。

(3) 11月8日 福井県大野市 結の故郷づくり交付金事業について

(報告者 栗野 久明)

合併して大きくなった市は、その運営で苦勞している実情を肌で感じた。市民は一样に行政サービスを受ける権利はあると思うが、まちづくりの交付金事業はその受け入れが整ったところに給付されるが、それ以外のところにはなかなか給付されない問題点がある。このことは自治体間の競争を生み相乗効果もあるが、一方では、公平感が損なわれる。

地方自治体の執行部は常に問題点解決のために情報の収集が必要で、議員もそこには注意が必要である。

(報告者 大久保 由美子)

基山町には「まちづくり基金事業補助金制度」がある。

① 5人以上の会員を有する団体で、1団体に年間20万円を限度として3年間を期限としている。平成29年度からは3年間継続後、特例として認められた団体は年間10万円を限度に3年間補助がある。

② まちづくり計画の策定団体は年間30万円を上限として、計画に基づいた期間支援がある。

大野市の交付金事業は、基山町では②に似ているが現在1団体のみ交付している。

基山町まちづくり基本条例が策定され「まちづくり基金事業補助金制度」ができたが、②の事業計画を提出する団体は浸透せず課題が多いのだろうか。

地域の問題解決や活性化のために協働で事業を進めていくことが、これからの少子高齢化の中では必要不可欠と言われているが、大野市も交付金事業に様々な諸問題と課題の報告があった。今後、町に活かしていくために、研修でいただいた資料も活用して課題や問題などを検討し推進していきたい。

(報告者 大山 勝代)

平成22年度からの制度。10年経過した中でさまざまな問題点や課題が見えてきているようだ。市内9地区、年間合計1千万円ほどの交付額で、地区独自の事業を住民主体で行うこと自体困難を伴うだろうという思いが先に立つ。と同時に敬服もする。地区の区長を中心に進められるのだろうが、公民館長として職員の配置が整っていることに納得した。今後ますます人口減・少子高齢化が促進される中、同事業を維持発展されるよう期待する気持ちになった。

(報告者 河野 保久)

① 地域づくりを推進するため、市民自らが主体的に企画・立案し、実施する事業に対する財政支援制度であり、実施計画書を提出することを実施要綱に定めている点はわかりやすい

② 交付金の総額目安を前年度個人市民総額の1%を限度と決めている点は、財政

的にも理解しやすい交付金制度となっていると感じた。

③ 対象事業が具体的に定められており、使い勝手のいいものになっている。

④ 各年度ごとに各地区での交付金事業の実施報告書が作成されており、事業の継承につながっていると思った。

⑤ 「天空の城 越前大野城」を中心とした整然とした町並は、北陸の小京都の名にふさわしいものであり、再度、ゆっくり訪問してみたいと思いました。

⑥ 市政概要の中に「明倫の心を重んじ、育てよう大野人」という、平成 21 年 3 月に策定された大野市教育理念が記載されていた。市の教育に対する思い入れの強さがうかがえた。

(報告者 松石 健児)

大野市の総面積は基山町の約 40 倍で、全国有数の広い自治体だが、人口は基山町の約 2 倍程度に留まる。また、平成 29 年 4 月には、時限法である過疎地域自立促進特別措置法による特別措置を受けている。

大野市の「結(ゆい)の故郷(くに)づくり交付金事業」は、市民参加型の行政運営により地域の課題を解決していくことが目的で、市民自らが主体的に企画立案し実施する事業に対し財政支援する制度。

この交付金は、当市が設置する公民館の区域(基山町という行政区)を単位(計 9 区域)としており、社会教育関係団体及び自治会(基山町という組合)が実施する事業に交付している。交付額の総額は前年度の市民税の 1 %を限度(均等割・人口割などにより各地区に限度額あり)と明確に提示しているところは特徴的だった。

基山町にも「まちづくり基金事業補助金」があり、大野市と同様に 3 年間を一つの区切りとして見直しを図っているが、大きな違いは、基山町では継続性を主体としている任意団体への交付が多い反面、大野市では、夏祭り、マラソン・ウォーキング大会等のイベントや、歴史講座、地域づくり講演会等、単年度完結型にも多く交付していたところだった。これは公民館(行政区)単位で「地域力を継続的に高めていく」という視点からみれば、単年度事業も継続の一環なのだが、交付団体と事業の実施団体が区分されており、事業目的が分かりにくいと感じた。

行政区は前述のとおり、広大な面積を 9 地区に分類されているが、それぞれの地区人口は最大地区で 13,420 人、最小地区で 48 人と大きな開きがあり、過疎地域も散在する。これら行政区で一様の地域力向上は非常に難しいと思う。実際に大野市も、頑張る行政区と何もしない行政区との間で大きな「差」が生じているという。このまま行政区任せでは、基礎自治体版地方創生交付金となり、さらに格差を生む危険性が生じると感じた。

基山町も同様に、少子高齢化による事業推進力が課題となるが、人材の発掘・育成は共通の課題として認識できた。地域のことは地域で解決するという住民参加型の行政運営は、決して住民任せの事業活動ではない。公平な行政サービスはもとより、現在行われている交付金事業の他に、行政も各地域に必要とされる課題を提起し、啓発と併せて事業展開していく必要があると考えさせられた。議員としても基山町のあらゆる地域から課題提起できるよう、常に情報収集することに努め、真の意味での協働のまちづくりに貢献していきたい。

(報告者 天本 勉)

この事業は、市民参加や協働意識を醸成するため、市民自ら主体的に企画立案し、実施する事業に対し支援するもので、平成 22 年度から実施されている。交付金の総額は、前年度の市民税 1 % を限度額（令和元年度は 1,380 万円）とし、現在自治会やまちづくり団体など 9 事業が展開されている。

また、行政区ごとの活動についても交付金の対象となっており、頑張る集落と何もしない集落との間で大きな「差」が生じていると説明を受けた。

地域活性化の事業ではあるが、課題として高齢化の問題もありマンパワー不足で育成が必要なであり、基山町においてもその必要性を感じた。

(4) 11 月 9 日 福井県福井市 一乗谷朝倉氏遺跡資料館視察

(報告者 栗野 久明)

歴史民俗資料館は観光客が見るものかどうか疑問があるが、地元に住む者にとってはいつでも当地の過去の歴史を知るために、整然と整理されて展示していなければならないと思う。

一乗谷朝倉氏遺跡資料館に展示されている^{しゃくだに} 笏谷石は、約 1,500 年前に発見され採掘されるようになり、水に濡れると深い青色に変化するため「青石」とも呼ばれ福井の名石だと説明を受けた。この地で長く続いた採掘・加工の文化を知ることができた。

基山町では、邪馬台国の時代 ➡ 古代山城の時代 ➡ 江戸の長崎街道 ➡ 近代の薬の製造や置き薬の時代へと当地の歴史の流れと人々の営みが見て取れる歴史民俗資料館の建設が望まれる。

(報告者 松石 健児)

朝倉遺跡と併せて訪問。朝倉遺跡は昭和 46 (1971) 年に国の特別史跡に指定されている。

資料館では、戦国時代最盛期には人口 1 万人を超える越前の中心地として栄え、平定を成し遂げた朝倉氏と、その城下町である一乗谷に関連する歴史的な資料や出土品、模型が展示されている。平成 19 (2007) 年には、遺跡からの出土品のうち、2,343 点が国の重要文化財指定を受けている。ボランティアガイドや映像解説などで、とても分かりやすかった。

城下町には「上城戸」「下城戸」という地名があり、基山町の地名「城戸」を思い起こす。現在も遺跡は、福井市城戸ノ内町に位置する。

基山町の古代山城「基肄城（きいじょう）」は、朝倉遺跡より 17 年も早い、昭和 29 (1954) 年に国の特別史跡に指定されている。平野部でも都市開発により歴史的出土品も数多く出土されているが、旧図書館の閉鎖解体により役場庁舎や倉庫などに分割保存され、その一部が不定期で現在の図書館に展示されている。

平成 31 年 1 月には、基山町の歴史的風致維持向上計画が主務大臣（文部科学大臣、農林水産大臣、国土交通大臣）から認定され、第 6 章には「歴史的風致維持向上施設の整備又は管理等に関する事項」が記載されている。その一つに、「基山の歴史と文化を情報発信し、かつ町域の歴史的まちづくりで活動する関係団体の活動拠点と

する施設」として、「きやまんもん文化遺産情報館（仮称）整備事業」が含まれており、事業期間が平成 36（令和 6）年度～平成 40（令和 10）年度となっている。このような歴史民俗資料館の建設が望まれるところではあるが、事業手法が町単独費となっており、町財政が厳しい中、事業費をどう捻出するかが課題だ。今後は文化庁、県等と十分話し合い、補助金も視野に入れ考えなくてはならないと考える。

（報告者 天本 勉）

5 代 100 年で育まれた朝倉氏の素晴らしい文化が発掘され、再現されていたが、栄枯盛衰世の常、無常さを感じた。

5. まとめ

総務文教常任委員会は、小学校の全国学力調査でランキング 3 位の福井県のあわら市、池田町、大野市に、学力向上の取り組みを学び、その外、ゴミのリサイクル事業・交付金による協働のまちづくりの取り組みなど、今後の基山町の課題解決の参考になるよう計画した。

学力向上が学校教育の全てとは思わないが、児童の学力が一定の水準に達することも必要であり、その取り組みを見聞きし、各議員は今後の教育面の方向性を掴めたと考える。

今回、快く研修を受け入れていただいた、あわら市、池田町、大野市様の関係機関の方々に総務文教常任委員会を代表して感謝申し上げます。